

序

著者	小長谷 有紀
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	119
ページ	3-4
発行年	2014-06-10
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008596

序

小長谷有紀

本書は、中国内モンゴル自治区フルンボイル市において、ブリヤート人を中心に24人の高齢者から聞き取りをしたオーラル・ヒストリーの記録集である。

ブリヤートとは、モンゴル語の1方言を話すモンゴル系の1グループで、モンゴルのなかでもとりわけ20世紀の社会的激動の影響をつよくうけて移住をくりかえした。まず、1910年代、ロシア帝国での反革命勢力がバイカル湖周辺で反乱をおこすようになると、その騒乱をさけてモンゴル国および中国に幾度かにわたって移住した。移住先の1つである中国東北地方に定着した集団を、移住先の地名を付して一般にシネヘン・ブリヤートと呼ぶ。当該地域では1929年1月にソ連軍が進入してきたため、一部の裕福なグループは騒乱を避けようとして南下し、シリングル地方（中心はシリンホト市。地図参照、以下同様）に移住した。この移住先一帯ではやがて徳王を傀儡とする日本の植民地活動がさかんになり、ブリヤート人は日本との関係を強めた。一方、1932年に「満洲国」が擁立されると、南下しなかったグループも日本と親密な関係をもった。国境を越えて移動してきた人びとのマルチリンガルな教養がスパイ活動に利用されたのである。日本の敗戦と同時に、ブリヤート人は逃げ散ることとなり、その道中、ソ連軍、八路軍などと遭遇する。こうして、ブリヤート人は最終的には青海省にまで至り、その道中の居残り組がウラド旗に分散居住した。そして、その多くは1950年代にフルンボイルに帰還した。やがて、文化大革命（1966～1977）をむかえると、かつて日本語教育を受けていたことや、関東軍と密接な関係にあったこと、国境を越えて往来したことなどから、批判の対象とされやすく、辛酸をなめることとなった。1991年にソ連が崩壊すると、こんどは祖先の地への帰郷運動が起こり、一部の人びとはウランウデへ移住した。ここでは民族料理を提供するレストランを経営して成功した人びとも多い。一方、適応できず、ふたたび中国へ帰還した人びとはかつての故郷を失ったうえに、旧来の移住先であるフルンボイルを故郷としてさらに失うこととなり、「二重のディアスポラ」（島村 2011）状態にある。かたや、満州里で国境貿易に従事して成功している人びともいる。ブリヤート人の多様な現代的展開は、マルチリンガルな教養や国境を越える精神によって開拓されている。

以上のようなブリヤート人の20世紀の移動史の中国内での状況については、これまであまり知られてこなかった。当時、現地で活動していた日本人による回想録があるものの（岡本 1979, 1988など）、それらは基本的に1945年以前の社会状況と、戦後の日本人との交流をえがくにとどまる。本書のインタビュー어의1人であるツォクティン・ジャムス氏がモンゴル語で地方史を刊行するなどして（扎木苏 2010）、ようやく知られるよ

うになりつつある。

本書は、現在中国に住んでいる24人の高齢者にインタビューをおこない、オーラル・ヒストリーとしてモンゴル語縦文字でテキスト化したものに、日本語訳を付したものである。インタビューは2011年から2013年にかけて3度、サランゲレル教授（中国中央民族大学モンゴル言語文化部教授、2013年4月から1カ年は国立民族学博物館の外国人研究員（客員））を中心に、現地のフルンボイル大学で教鞭をとるソヨルマ教授の協力を得ながら、小長谷をふくめて複数人でおこなった。テキスト化はサランゲレル教授が担当した。邦訳はナチンションコル氏（岡山大学農学部研究員）の助けをかりながら小長谷が担当した。また、冒頭にサランゲレル教授とソヨルマ教授の共著による解説を付した。解説の日本語訳はサイジラホ氏（国立民族学博物館、JSPS 外国人特別研究員）に大いに協力していただいた。日本語訳に協力してくれた方がたには、記してその労に深く感謝する。なお、日本語訳においては必要に応じて〔 〕で訳注を付した。

今回の語りのなかには匿名の方のものがふくまれている。このことは、これらの語りの内容がいまだ社会的に開放されているわけではないことを明示している。たしかに多くの語り手が詳細にふみこもうとはしなかった。一方、多弁な語り手は、もっぱら現代中国において公式的な見解に沿う語りを展開している。回避的な傾向と公式的な傾向との混在は、決して矛盾ではなく、まさに歴史に対する理解が自由化されていないことを示している。それでもなお語ってくださった方がたに深く感謝したい。時代の激動をみずから経験してきた人びとの人生史は、当該地域の現代史を再構成するうえできわめて重要である。本書をつうじて東部ユーラシア遊牧民の激動の現代史にすこしでも光をあてることができれば幸いである。

参考文献

岡本俊雄

1979 『一人の「ブリアートモンゴル人」と日本青年との出会い』（私家本）。

岡本俊雄

1988 『一人の「ブリアートモンゴル人」と日本青年との出会い 続編』（私家本）。

島村一平

2011 『増殖するシャーマン』神奈川：春風社。

扎木苏

2010 『锡尼河布利亚特』呼伦贝尔：内蒙古文化出版社（蒙文）。